## חג הַּמָכוֹת

2022 (5783)

# בְרֵאיִעית יד אַחַרִית



ハッスッコート コンロフ 入 仮庵の祭り

בראשית

創世記1章14回目

(最終回)

創世記2:1~4a

神は第七日を祝福し、 この日を聖なるものとされた。 その日に神が、 なさっていたすべての創造のわざを やめられたからである。

(創世記2章3節)



8日間の「セレブレイト・スッコート」。

空知太教会で 2015 年より続けてきた「仮庵の祭り」を、 初めて ZOOM で試み、創世記 1 章を 14 回で講解しました。 いかがでしたでしょうか。

「祭り」という非日常の空間で

皆様と霊を一つにして、イェシュアに満たされる美しい8日目。 何が起こるか分からない、奇跡が紡がれる神様とのひとときでした。 では、最後の講義を始めて行きましょう。

創世記1章を学ぶ上で、大切な視点を簡単に触れたいと思います。

#### ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。

聖書は、どこを開いてもイェシュアが証しされ、宣言されています。
イェシュアの証しを見つけることが、教会にいのちを与える唯一の
方法です。 礼拝はイェシュアが証しされる時間です。ですから、
イェシュアが語られない礼拝は、礼拝ではありません。
それは、聖書が正しく語られていないということです。

聖書のどこを開いてもイェシュアが出てきます。

私たちは、イェシュアをしっかりと語ることのできる教会、

また、クリスチャンにならなければならないと思います。

#### イザヤ書 46 章 10 節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

聖書のシナリオライターは、神様です。

永遠の時間軸で、シナリオが書かれています。ですから、

既存の時間枠や空間枠で歴史を考えると、辻褄が合わなくなります。

後のことが、昔と重なる不思議な歴史支配です。

詩篇は、イェシュアがいる前提で預言的に語られています。

聖書は霊で語られ、いのちを与える書物です。そして、

イエシュアの語ることばは霊であり、いのちです。(ヨハネ 6:63)

詩篇で語られる預言も霊であり、いのちです。

たましいの領域と時間軸では、

みことばを預言的に受けとめることができません。

旧約聖書も「イェシュア」という鍵で、ようやく開かれてくるのです。 そこには、見事な神様のご計画が映し出され、

いのちを伴う世界へと誘われていくのだと思います。

また聖書は、ある一箇所だけを見ても解釈できません。

伴侶のように支える箇所が必ずあって、聖霊が導いてくださいます。 イサクの嫁探しに出たエリエゼルも、「一人の御使い」に導かれて リベカと会うことが出来ました。

このようにして、聖霊の導きを受けながら、聖書を読む訓練を続けていくと、伴侶のような聖書箇所に出会う楽しさを知るようになります。 そこから、聖書が開かれ始めるのです。 どうぞ、

#### ヘブル人への手紙 4章 12節

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

創世記を学ぶ時に最も難関なのは、たましいと霊を切り分けることです。

理解はしていても、霊の中で考え、霊で生きる学びをしなければ、 たましいの世界へ引きずられてしまいます。

たましいの領域は、混乱したり悩んだりする世界です。 しかし、 霊の世界では、一見矛盾するようであっても、受け入れ始めます。 主のご臨在が実体化されるからです。

自分で「理解の型紙」を破ろう、破ろうとしても難しいのですが、<br/>霊で語られる話を聞くと「理解の型紙」が、

自然に破られるように砕かれて、霊の中で考えるようになります。

「理解の型紙」を固辞する人には、開かれることなく、ますます 頑なになっていきます。

アシュレークラスに参加される皆さんが凄いなと思うのは、

それまでの「理解の型紙」とは、違う解釈であるとしても、

アシュレークラスの学びをすんなり受け入れておられることです。

非常に柔らかい心を持った人たちを、神様が集めてくださいました。

メンバーの、お一人お一人が受け止めてくださるので、

アシュレークラスでは、議論をせずに進むことができるのです。

たましいの世界で聖書を学ぶと、混乱が起こり、議論になり、神学論 争となって、分裂します。 しかし、霊の世界は、一つの理解です。

「御霊は一つ」 御霊には一つにする力があるのです。

一つとなる力を、私たちは今、体験しています。

さあ、始めましょう。セレブレイト・スッコート最終講義です。

テキストは、「 創世記 2 章 1 節~4 節前半 | です。

まず、4節の前半、最後の部分を確認します。

#### 創世記2章4節前半

これは、天と地が創造されたときの経緯である。

(4節後半は「地と天」で始まり、「天と地」が逆転しています。)



関根訳:「以上が」は、これまでの結論を示す接続詞です。

アシュレークラスでは、創世記 1 章 1 節を、全聖書のタイトルと 位置付けましたので、「以上が」は、

1章2節~2章3節の経緯の完結を表現しているといえます。

## 「経緯ハブブブル」は、ハブブブルの連語形

(※「何々の経緯」といかたちで繋がると変化する=連語形意味:何々の家系、系図、由来、次第、成立事情、後継者、歴史、系列、路線、成立・実際に、聖書で使われている訳を書いてみました。)あらゆる聖書を調べて訳すと、本来のニュアンスを失う語彙の一つとされています。

系図とか、何々の次第とか、成立事情とか、系列(流れの区別)が出てきて、こんなに意味合いが変わります。非常に難しい訳ではないでしょうか。聖書の流れや本質を掴まないと、訳せない言葉です。

他の人は入っていません。 この系図の特徴は、誰が誰を産んだという形式です。マタイの福音書 1 章の系図にも、同じ形式です。 イエシュアにつながる極めて重要な「系図」です。

「系図」は、途切れずに連続して繋がる流れを表しています。 「経緯」とは少し違います。

#### ヘブル人は系図を重んじる

ヘブル人が系図を重要視するのは、「生めよ 増えよ 地に満ちよ」という至上命令を、神様から与えられた特別な民だからです。 この民からメシアが生まれ、やがて神様のご計画を実現させて、 多くの実を結ぶ選民として、系図を重んじているのです。

なぜ創世記 1 章が 31 節で終わるのか
2 章 4 節前半までが一つの区切りのように見えますよね。
もし、区切るのなら、2 章 4 節までを、32 節 33 節 34 節 35 節にすれば? と思いませんか。どうして、2 章になるのでしょう。
2 章 4 節前半の後では、全く別な創造の記事が書かれています。
なぜ、こんなに中途半端なのか。考えることありますか。

#### 創世記2章1節

こうして天と地とその万象が完成した。



2章 1節、最初の接続詞を、多くの聖書は結論の接続詞「こうして」 と訳しています。 1章の記述を総合させた流れです。

「こうして天と地とその万象が完成した」と繋がります。

新共同訳だけは、多くの接続詞を訳さない方針のようで、

「天地万物は完成された」と訳しています。

#### 接続詞

接続詞は、訳者が流れを把握していないと訳せません。

また、聖書は接続詞で繋がっているような書物でもあります。

接続詞を訳すのが、一番難しいかもしれません。

1章1節で「天と地を創造した」と記した後で、

「地は茫漠としてなにもなく」の「地」に接続詞があるのです。



**アフスフ** これは、どのような接続詞でしょう。

「そして」にすれば1節と2節をつなぐ接続詞です。

- 1節が「見出し:神様のご計画の全貌を記すタイトル」で、
- 2節から創造が始まるのですから、2節冒頭の接続詞は、

「ところで」とか「さて」など、話題転換の接続詞になるでしょう。

2 章冒頭の接続詞を訳さず「天と地は完成された」とすると

前の記述から、神は満足しておられると予想して接続詞を訳さない のは、一連の流れや本質を掴めないまま進むことになります。

- ●2章1節の接続詞 ? こ は、1章2節~31節と、
- ◆2章2節~3節(安息と第七日)を結び付けています。
- ●前者(1章2節~31節)は、

創造の目的が果たされた、神の満足を告げています。

メオード 7メン コン りょうに良かった。

そして「夕があり、朝があった」でまとめられています。

◆後者(2章2節~3節)は、

神が満足してから、何を生み出すのか、

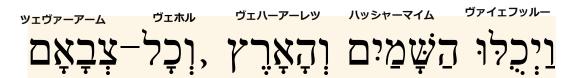
次にどのような状態になるのかが記されています。

満足した結果、神様の休息あるいは神様の安息が、

2章2節~3節に記されています。

しかも、徐々に内容が詳しくなる総合パラレリズムとなっています。 同じ内容が積み重なり、さらに新たな情報が入れ込んで全体がより 理解できる形式です。4 節前半までをだいたい把握したところで、 2章1節「天と地とその万象が完成した」を見てみましょう。

#### 「こうして天と地とその万象が完成した」



カーラー **フラ** 「完成した: 受動態」

「完成した」とあるのは、「完成された」という意味の受動態です。

万物が自分で完成したように見えますが、

万物の完成は、神によるものです。

聖書には、「万象」と同程度に「万物」も良く出てきます。

ッェヴァーアーム ホル コ**、シュ・アー**フ 「すべての万象」

「万象」とは、

天にあるもの地にあるもの、見えるもの、見えないものすべてを含みます。 万象が完成されました。

未完了受動態で継続ヴァヴという独特な文法で、完了形です。

「完成された」のです。

#### 「万物が完成された」とは?

万物は、神によって造られたと頭では理解できます。

すべての万物は、キリストにあって、キリストによって、キリスト のために造られたとあります(コロサイ書 1:16)。受動態です。 キリストのために、すべてキリストを表すために造られている、 それが「 キリストにあって完成されている 」ということです。 キリストにあって、万物が繋がるのです。

#### キリストと創世記1章

マイム ・ かか かけられました。上にある水と大空の下にある水を分けられました。上にある水 は常に開かれています。

下にある水□は閉じています。(6~8節)

閉じられた水から乾いたところ (9節)

そしてもう一方、水の集まったところを海 (複数形)が現れ 二つに分けられます。複数形の不思議な海です。(10節) 乾いた所を歩いた人たちがいます。イスラエルの民です。

そして海(複数形)は、イスラエルに敵対する諸国民です。そして、 乾いた所を歩く人たちに食べさせる食物を生えさせました。(11節) 人間を造り(26-27節)、種の出来る草、種の入った実を結ぶ果樹 そして種の入らない緑の草が生えるようにと神様は言われました。 マーオール

神のご計画を示すしるしとなるために、

天に二つの光るものを置かれました。

地を照らすために、すべてに光を与えました。(14-15 節) 水の中でうごめく生きものは、諸国の異邦人の民だと解釈しました。 翼のある鳥は、羽根が与えられた「王なる祭司」として務めを成す 「イスラエルの残りの者」を表わしています。(20-22節) ですから神はその二つを「 生めよ 増えよ 地に満ちよ 」と 祝福しました。(22 節)その後で、すべての生き物が出てきます。 家畜(羊や牛)は神の民を主に近づけるための献げものとして・・。 地を這うもの、地の獣は、イスラエルの民たちが、 神様にきちんと立ち返って歩むように矯正役をする者として・・。 用が終われば不要ですから、彼らが永遠に増えるとも、 祝福するとも言われていません。(24-25節) そして「人」、最初のアダムと、最後のアダムです。(26-27節) 最後のアダムとかかわる女は「イスラエルの民と教会:女性形」です。

これは奥義です。 神様は、「 人 」を創造されるのです。

そして彼らに、魚と翼のある鳥に言われた同じ言葉で祝福します。

「 生めよ 増えよ 地に満ちよ 」(28節)

これらすべてを用いて、「 天と地 」がキリストによって一つとなるように、神様はご自身のご計画の全部を啓示されました。

しかし、その本意は、たとえの中に隠されています。

たましいの解釈では、決して解けないパズルのように

創世記1章は設定されています。凄いことですね。ですから、

生かされた霊で読まなければ、創世記1章から躓いてしまうのです。

「万象」は、後に神の御子イェシュアが「 人 」となって来られた 時、明かされました。それまでは隠されていたのです。

私たちは、目に見える天と地にあるすべての物は神様が造られ、

それぞれに個性豊かで種類も多く、違いを持って存在していると、

漠然と考えています。 しかし、

コロサイ人の手紙を書いたパウロの視点は全く違いました。

コロサイ人への手紙1章15-17節

15 御子は、見えない神のかたちであり、

すべての造られたものより先に生まれた方です。

- 16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、 御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、 御子のために造られました。
- 17 御子は万物に先立って存在し、 万物は御子にあって成り立っています。

これが万物(万象)と御子とのかかわりです。

「すべて見えるものも見えないものも、この世に存在しているあらゆるものは、御子によって造られ」とありますから、

御子は創造主であり、被造物でもあるのです。(17節)

私たちの理性では受け入れ難い内容です。

教会の歴史は、イェシュアが神なのか人なのかという問題を 解決することなく繰り返しています。

御子は人間だとか、神だとか、いろいろ言われます。

ある人は、神の部分が 50% 人の部分が 50% と 長年聖書を何十回と通読している人が、そのように言っていました。 でもそれは違います。

#### 御子は100%神であり、100%人

御子は、創造主であり、また完全な被造物でもあります。

受け入れますか。

認めますか。

すべての万物(万象)は、御子にあって造られているのです。

霊の世界で受け取るしかありません。

霊の目は、万物と御子とのかかわりを見せてくれます。

今回、創世記1章をひも解いていきました。

様々な聖書箇所を引用し、結びつけながら講解してきました。

皆さんはどう思われましたか。納得されましたか。

聖書を霊で読む人には、腑に落ちるのです。

ある程度聖書を把握している人にとっては、バラバラだった箇所が

御子によって結びつけられて、一つになるのが分かると思います。

聖書は、神の息吹によって書かれ、シナリオライターは神様です。

聖書は、御子によって一つになるように仕掛けられています。

ここが結びつくと、私たちの霊は感動して嬉しいのです。

聖書が楽しく思うのは、神様の霊の中で味わうからです。

腑に落ちる人と、頑なになる人。霊で読むのか、たましいで読むのか。

トーレドート

これは、もう一つの路線】「ファー」で、初めから理解できる人と、

出来ない人が決まっているようです。それは、

天が造られる前から、地の基が置かれる前から、

どちらの路線にいるのかも、神様サイドでは定められているようで、 私たちでは、どうこうすることが出来ないわけです。

#### 創世記2章1節

こうして天と地とその万象が完成したファラー。

動詞 : 完成した 仕上げる 成し遂げる 全うする 終える (ヘブル語の主語の主体は三人称単数=神様)

神が完成させる 神が仕上げる (子) その結果ある者たちは 尽き果て 消え失せ 衰え果て 滅ぼす 疲れ果てる 終わる 根絶する

名詞 7 2 : 滅亡 絶滅 完成 完了

☆両義性を持つのは、ヘブル語の主体である神様が 救いか滅びかを決定されるからです。 人間のことばにすると一つのことばが真逆の意味を持つので、

理解しにくいかもしれませんが、神様にはできるのです。

「救い」と「滅び」が、同じことばです。

完成した一方で、滅びるという現実があるということです。

「イェシュアを信じる」と、「メシアを信じないで滅びに至る」こと がワンセットで語られています。

カーラー は創造だけでなく、神のご計画が神の主権によって成し遂げ られ完成する、とっても大切なことばです。

「実現を待ち望む」 = 慕って絶え入るばかりです。 (詩篇 119 篇 81,82 節)

「私のたましいはあなたの救いに慕って絶え入るパープログロックはかりです。」

「私の目はあなたのみことばを<mark>慕って絶え入る</mark>ファンばかりです。」

専心することで、期待して期待して、たましいが削がれていく、という意味です。 神のご計画が成就することへの熱い対応表現です。 慕って絶え入るばかりのアシュレークラスの皆様に、

キリストが  $\pi\lambda\eta\rho\omega$  される (満たされる) 期待を啓示しています。 キリストですべてが満ちあふれていく、キリストのいのちですべて

が覆われ、満たされ、溢れて流れる世界が ファンです。 実現するだけではなく、実現したものがさらに溢れて流れていく、 いのちは流れていくものです。満たされているだけでは滞ります。 いのちは流れて生かされます。2章の1節は、続いていますよ。 ユダヤ人が神から与えられた律法も万象の一部です。

神様はユダヤ人に律法を与えました。 プラー は神様のみこころ そのものです。 神様の望み、必然を宣言する内容が書かれています。 どのように実現するかは隠されています。 実は、神様の語る律法は「 キリスト 」という鍵で実現するのです。

「 律法が目指すものはキリストです。 」(ローマ人への手紙 10 章 4 節)

カーラー

キリストを目指すことばがファンです。

<sub>テロス</sub> TĖλOς:目指す 終わり 目標 = フラン

律法が終わる 終了する 終結する 終結する 完成し成就し 仕上げられ 究極の目的が果たされる

#### マタイ 5 章 17 節

わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思ってはなりません。 ん。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。

イェシュアは、本当の律法を実現するために来たと言われました。 当時、ユダヤ人の大切にしているアイデンティティと、良い行いと して、割礼を受ける、食物規定を守る、断食する、安息日を厳守する が彼らを支えていました。今でも続いています。

「割礼、食物規定、断食、安息日」の本質を説き明かし、<br/>
究極的に成就するのがキリストです。キリストがなければ、<br/>
本当の意味が分からないのです。

#### **— 割礼 —**

アブラハムから始まりました(創17:9-14)。

ユダヤ人の男の子は、生後 8 日目に割礼(包皮を切り取る儀式)を します。

メシアも8日目に割礼を受けました。イェシュアはユダヤ人です。割礼の本質は、肉で生きるのではなく、霊によって生きることです。肉を切り取って霊によって生きる、肉を削いで霊で生きることです。それは、キリストによって、実現しました。 残念ながら、ユダヤ人は、未だに割礼の本当の意味を知りません。 ヘブル人の中のヘブル人であるパウロは、割礼を受けているかどうかは全く問題ではない、キリストにあって新創造されているかどう

#### 一 食物規定 —

かが問題だと言いました。割礼本来の啓示を理解したのです。

現代もユダヤ人は、食物規定を守っています。イスラム教も同じです。 彼らが厳格に守っている食物規定の本質は、イェシュアの啓示です。 ですからイェシュアを受け入れるなら、食物規定から解放されます。

**反芻する** イェシュアが天に上げられた表象です。

ひづめが分かれてパンを裂く、

からだを裂かれて、流された血潮によって神と人の隔ての中垣が 破られることを表しています。イェシュアを啓示しています。 食物も万物の一つで、食物がキリストを表しています。 すべての万物はキリストと結びついて完成します。

#### **— 断食 —**

食事を絶つことではなく、神様のことばに専心することです。 40 日 40 夜イェシュアは荒野に行って、

神様のことばを食べて神様のことばで武装しました。

そして敵対するサタンと戦う備えをしていたのです。

サタンが訪ねて来て、質問することも前提として、どのように 「御国の福音」を伝えていくかの準備をしている期間が断食です。

#### 一 安息日 —

ユダヤ人の考える安息日と、神様の安息日は全く違います。 イェシュアは、ユダヤ人の築いた「理解の型紙」を破ろうとしますが、 ユダヤ人たちは、敵対する者と見做して殺そうとするのです。

私たちの「理解の型紙」が、音を立てて崩れれば崩れるほど、 イェシュアに出会うことができます。

いのちの律法が立て上げられ、成就する形でイェシュアが 人の霊の中に入りました。 そして、ユダヤ人たちが長年、 守り続けてきた律法の本質を悟らせようとされたのです。 外側からではなく内側の霊によって彼らに、真の意味を伝えて 造り変えようとされました。 そのために、

「 死と復活 」によって、最初のアダムを終わらせました。 最後のアダムであるイェシュアが「いのちを与える霊」となって 人間を新創造していくことで、律法の目指すものが実体化します。 律法の究極の目的、人間の行きつくところは、神様の安息です。 そうなるまで、私たちの内で働き続けておられるのです。 万物は、キリストにあって正しいかかわりを見いだし、 みこころが遂げられる時に完成して、神様が安息されます。 安息日の順守の話ではなく、神様の安息が最終的目的なのです。

#### 創世記2章2節

神は第七日に、なさっていたわざを完成し、 第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

נְיָכַל אֶלְהִים בַּיּוֹם הַשְּׁבִיעִ מְלַאכְתּוֹ אֲשֶׁר עְשָׂה;

בִּיּוֹם הַשְּׁבִיעִי, מִכָּל –מְלַאכְתּוֹ אֲשֶׁר עְשָׂה,

完成し、やめられた (安息した) 記述の背後に、キリストによって、

万物が本来神様の意図したかたちになったことを表しています。 それが第七日「安息日」です。

コップン ファイエバル ヴァイエバル ファブラ (終えられた)」 (かいつ?



今その意味で完成された日を「第七日」と呼んでいます。

第六日は完成前です。被造物を造って神様が喜んだ話です。

キリストにあって、すべてが一つになる、

その目的の成就が「第七日」です。

人にすべてを任せて、神様が働きをすべて終了するのが第七日です。





日として)

第七の日に、同じことを言っています。

「やめられた」と「完成された」です。



神様の働きのすべてから安息された日が設定されています。

#### 第七日(安息日)

第七日は未完成のままです。神様は未だ安息されていません。

ユダヤ人は、安息日を順守することに精一杯で、

「安息」の本質を理解していません。

イエシュアを受け入れないために、その意味が明らかにされず、

実現しないのです。 キリストが教えて、実現してくれるのに・・。

ではクリスチャンはどうなのでしょう。実は、

クリスチャンも知らないのです。

知らないことばかりで混乱しているのです。

#### 創世記2章3節

神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

第七日が説明されています。

神様は、第七日を祝福しその日を聖なるもの、特別なものとして区別

され、その日に神がされていた「創造のわざ」をやめられました。 2節では、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめましたが、 3節では、第七日は特別に、聖なるものとして、祝福しています。 神様にとって、第七日は特別な日です。 そして 第七日が実現すると、神様が初めて安息すると書かれています。

#### 一 2節3節の重要な語彙 ―

「第七日 <sup>プリ</sup>ユヴィーイー ヨーム 「第七日 <sup>プリ</sup>ユヴァット」と「やめられた フユヅ」 (休む 安息する)

2章1節~3節の構文は、順次、新たな内容が加えられる総合的なパラレリズムで、だんだんと様子が明かにされています。

1節:天と地とその万象が完成した日を、

2 節:第七日は、神様がなさっていたすべてのわざをやめられた日 (安息した日)と記された。

3 節:神様は、第七日を祝福して聖なる日とし、特別な日とされた。

2章 1~3節は、第七日が何であるかが見えてくる構文です。 創造のわざは、第六日で終わります。

### 第七日は、人の創造を完成することで、神様の満足と、 神様が安息する祝福すべき聖なる日とされました。

#### 神様が安息するって??

神様の創造のわざのすべてが、神様の代理者である人間に委ねられ た日、初めて神様は安息されるのです。

人間が、神様の代理者として働くことができれば、神様は安心して 休むことができる設定です。

そのとき人間は、肉体的に支配されない

新しい御霊のからだが与えられ、自由に活動します。

24 時間賛美しても疲れないし、すればするほど、力やいのちが増し加わってきます。このような事態が完成するとき、

神様はゆつくりお休みになるのです。

安心して任せられる人が、地に存在すれば、神様は休息されるのです。

「安息」の概念が全く、変わります。

もう一度言います。

神様は、人が、神のかたちと似姿として(神様の代理者として)、 地を治めることできれば、ご自身の働きをやめられるのです。 回復訳は、「安息された」と訳しています。 安息は、 神様の創造の目的です。しかし、今も休みなく働いておられます。 ヨハネの福音書 5 章では、安息日の問題が浮かび上がっています。

#### ヨハネの福音書 5 章 5 - 9,17 節

- 5 そこに (ベテスダの池に)、三十八年も病気にかかっている人がいた。
- 6 イエスは、彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」
- 7 病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」
- 8 イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」
- 9 するとすぐにその人は治って、床を取り上げて歩きだした。ところが、その日は安息日であった。
- 17 ・・・「わたしの父は今に至るまで働いておられます。 それでわたしも働いているのです。」

「その日は安息日であった」のです。

イェシュアは、安息日を意識して「わざ」を行っています。

ここが、大問題です。

わたしの父は、今に至るまで働いておられます。

つまり、安息させてくれないからです。

ご自分の選んだ民が、神様に安息をもたらさないので、

今も働かれています。

イェシュアの語ることばは、すべて霊でありいのちです。

また、イェシュアの語るメッセージはすべて「御国の福音」です。

御国のデモンストレーションとして、奇跡が記されています。

出エジプトの第一世代が亡くなるのが38年目です。

38 年間病気の人は、イスラエルを象徴していたのです。

(使徒の働きで、ペテロとヨハネが「私にあるものをあげよう」と「イェシュアの御名」によって、40 歳の生まれながらの足なえを立たせました。)

#### 「 起きて床を取り上げなさい 」

イェシュアが、霊のことばを語っています。

たましいの人は、池に入るために誰も助けてくれないこと、また他の 人が先に入ってしまうので、どうにもならないと文字通り読みます。 しかし、イェシュアは直接「良くなりたいか」と言い、

「起きて床を取り上げなさい・歩きなさい」と促します。

そこに信仰が働いて、床を取り上げて歩き出した、復活した話です。

これはまだ実現していません。

後に「イスラエルの残りの者」が成すことを、

イエシュアがデモンストレーションしているのです。

「 ところがその日は安息日であった。 」 イェシュアは、後のイスラエルの話をしています。 安息日は問題ではありません。

しかし、ユダヤ人は安息日に癒したことを問題にしています。

彼らは、未だに、安息日に何もしないことをひたすら守っています。

「 安息 」とは、本来人間の力に寄らず、神様に、全き信頼をすることです。 安息日の制定は、神様を教え、理解することを意味しました。しかし、キリストという鍵がないために、理解されずに今も礼拝厳守を守っています。

クリスチャンでも、今日は礼拝を守れたことを感謝します、とする人たちもいます。同じ流れであり、宗教の霊です。イェシュアを完全に信頼して、キリストと一つになることより、

礼拝が守られたことを感謝するのは、神様の意図とは違います。

霊の中で安息することです。 「 安息 」とは、

私たちが、イェシュアの霊の中でとどまることです。

周りは台風のような嵐でも、霊の中は、風もなく、嵐もなく、静かで、

主と一つになっている世界です。

それが、安息日に制定された本来の目的です。

未だにその理解は成り立っていません。

イエシュアが来たのは、真の安息を実現するためです。

霊の中でイェシュアと一つになることが完成したら、

神様は、ようやく休めるのです。

ユダヤ人は、割礼、食物規定、断食、安息日すべてを、たましいで 捉えて、人間のわざで頑張っています。祭りも頑張っています。

イェシュアが祭りの終わりの大いなる日(8日目)大声で

「 乾いている者はわたしのところに来て水を飲みなさい 」と。

「 わたしの与える水はあなたがたの心の底から腹の底からその水があふれるように流れ出ると 」言いました。(ヨハネ 7:37-38)でもその水はまだ彼らには与えることができない状態でした。

与えることができるのは、イエシュアが復活して「いのちを与える霊」

となり、私たちの中に入ったことで、包括的に実現しました。

ユダヤ人たちは、未だに知らないまま、祭りを繰り返しています。

イェシュアは、しるしを通して「安息」を教えようとしています。

しかし、ユダヤ人たちは聞く耳を持ちません。

安息日を破った者は、神様の子であっても、

自分たちのシステムを破壊する人物として、放っておけないのです。

その結果、殺そうとします。 神様が安息日の規定を与えた目的は、

人が自分の肉のわざを終えて、完全にキリストを表現するためです。

キリストのかたちと似姿の「 人 」で、

地が埋めることが神様のみこころ

私たちも、キリストによって完全に支配されて、

シャーヴァット

キリストが私たちのすべてとなるとき、初めて神がコーンします。 私たちが、完全に贖われたからだになって、神を表現できるなら、 神は初めて休むことができます。

その日が「第七日」で設定されていまです。

それは私たちの安息でもあります。

なぜなら肉から解放されて、走っても疲れないからだになるからで す。走っても疲れない、休む必要のない世界です。 神に仕えながら常に活動しています。

自分のわざではなく、神のいのちで働くので、疲れません。

このような世界に、私たちは招かれようとしています。

神様が完全に任せて安息される時、私たちも自由を得ながら、

神様のわざを喜んで成していく者になります。

人間的なものから解放されることが、「安息」です。

私たちが、神のかたちと似姿になるために、神様はとりなし続けています。 また天の御座におられるイェシュアも私たちが勝利者となるようにとりなしています。

だからイェシュアが来られない限りは、この地に実現しないのです。 早く来て欲しいですね。

最初のアダムがエデンの園に置かれたのは、「 王なる祭司 」として、神様の代理者として、地を支配するためでした。

はじめはエデンの園で、人が置かれた時に、

神様は地を耕しそれを守る務めを与えました。

たましいで考えると、土を耕して畑を起こして耕作しなければならないと思うかもしれません。

実は、神のしもべとして、神に仕える祭司としての役割を与えられた

のでした。権威を持って行い、地を守る「王なる祭司」です。 耕して守る「王なる祭司」になるようにエデンの園に置かれました。 そのために「 人 」は、園にあるすべての木を必ず食べなければな りません。すべてを食べよ、思いのままではなくて与えられた物をす べて食べよ。神様の命令だったのす。

サタンがそそのかすことも知って、注意を与えたのにも関わらず 「 人 」は騙されてしまいました。 サタンが巧妙だったのです。 私たちが、神様に背いて神様の上になろうとは思っていません。 サタンに騙されたのです。

神様が、私たちをその状況から助け出さない限り救われないのです。

「第七日:神の安息プローン」

メヌーハー

7777 : 安息、休息 初出箇所・創世記 49 章 14 – 15 節

- 14 イッサカルは、たくましいろば、二つの鞍袋の間に身を伏せる。
- 15 彼は、休息の地が快く、その地が麗しいのを見る。しかし、 肩は重荷を負ってたわみ、苦役をしいられる奴隷となる。

#### 「たくましいろば」

ろばは本当に力持ちです。駱駝のように遠距離は苦手でも、 荷物や、多くの藁を運ぶことができます。

「イッサカルは、たくましいろば 彼は休息の地が快く その地が麗しいのを見る。

しかし、肩は重荷を負ってたわみ苦役を強いられる奴隷となる。」 という約束です。

ヤコブが自分の子どもたちに与えた預言はすべてイェシュアに関する預言です。 イェシュアに関する様々な面を、子どもたちの名前に振り分けて語っているのです。

「イッサカル:報い」

「休息プラランの地が快い」

彼はやがて与えられる休息の地、すなわち約束の地の麗しさを楽しみに待ちつつも、この報いを得るために自ら重荷を負うことを心に定め、奴隷(しもべ)として従うことを決心するということです。 イエシュア・メシアを預言しています。(マタイ 11:28-30) イエシュアは重荷を負う奴隷となっています。 神様が安息できる、最終的な休息を経験するときが来るのです。 安息日の休み、最終的な休み、神様が休む、そして私たちも休む、 寝転がって何もしない休みではなく、

神様と人が顔と顔を合わせながら、共に住む愛の世界です。 神様の安息は、私たちのあらゆる労苦を解放し、疲れない御霊のからだを与え、神様の代理者として立てられる御国の完成です。 私たちが代理者となって動くことが、神様の安息の概念です。 そして、安息日は、神の民のためにまだ残されています。 神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように 自分のわざを休みます。 霊の中で生きることを通して休みます。 自分の肉という、たましいとかからだに頼らないで、 神様が大切にされた霊の中で生きる時、自分のわざを休みます。

#### ヘブル人への手紙 4章9-10節

- 9 したがって、安息の休みは、神の民のためにまだ残されています。
- 10 神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、 自分のわざを休むのです。
- 9 節に「安息日の休み」(回復訳「安息日の安息」) というフレーズに

なっています。

安息日の7日目は、すべての者が仕事から休むという制定ですが 本来の安息を啓示するものではありません。

ユダヤ人たちは、安息日を厳守することにいのちをかけています。

目に見える文字通りの律法を、文字通りに解釈するのです。

ひたすら、厳守することに終始しています。

分からせるために、38 年間の病人の癒しをわざわざ安息日にしたのです。 ユダヤ人たちの反応は、癒された人に

「今日は安息日だ。床を取り上げるのは許されていない」と言うだけでなく、イェシュアを迫害し殺すようになりました。

イエシュアは彼らに言われました。

「わたしの父は今に至るまで働いておられます。

それでわたしも働いているのです。(ヨハネ 5:17) 」 安息なき 38 年の病人は、癒される前のイスラエルをたとえています。 神が第七日に休まれたのは、神のみわざが終わったからではなく、神の願いが達成されたからです。

神の願いとは、人が地上で神ご自身を表現し対応することです。 安心して任せられる「人たち」がいれば、神様は満足され、安息され ます。これが、第七日です。

創世記2章1-3節は、神様の包括的な出来事です。

第七日は、神が休まれたと同時に、未だ完全に休まれてはいません。

イェシュアが復活することで、「 人 」に安息を与える事ができた のですが、未だ完成されていません。

霊は生き返っていますが、からだが霊のからだになっていないからです。 この緊張関係に、私たちは今、置かれています。

近づいているけれども、まだ到着していないデリケイトな 状況の中に置かれています。

霊の中で生きて安息に入ろうと、ヘブル書の著者が語り、たましいと 霊を切り分ける話が続きます。

創世記2章1-3節の主要点は「神の安息」です。

神は「第六日」に人を創造したことに満足されて「非常に良かった」とされました。また「 人 」も満足していますが、まだ神様のご計画通りではありません。

#### 第七日は「神が安息される日」

第七日を祝福し、特別な日として聖なるものとして神は置かれましたが、まだ実現していません。

ですから三一の神は今も働いておられるのです。

一方、私たちが神の安息に入るためには、自分のわざを休む必要があります。 自分のたましいとからだを休めて、霊の中で生きます。 自分のわざを休むには、肉たましいからだで生きるのではなく、 霊によって生きることです。そのために、

私たちが御子のかたちと似姿に造り変えられて行きます。

御霊はことばに表現できないようなうめきをもってとりなしている のです。御子も天の御座で私たちをとりなしておられます。

#### 一 今日のまとめ 一

14 回にわたって学んできた「原語で味わう創世記 1 章」の学びはこれにて終了です。しかし、必ずしも十分ではありません。特に、最後の「安息」の概念は、さらに深く学ぶ必要があります。

最終目的は、天と地は別々ではなくて、天と地で一つとなることです。 特に神様は、「地」にとてもこだわっています。

神と人がともに住むのは天ではなくて、この地だからです。

天と地は一つになる、神と人が一つになる、イェシュアと私たちが 一つになる、とどまって一体となる、それが男と女の奥義です。 一体となるために、男は、父と母を捨てなければならないと、 創世記 2 章 24 節にあります。

多くのストイケイアは、人のわざ、肉のわざを強調します。 神とともに生きることを教えず、疲労を与えます。 なぜ、多くの教会難民がいるのでしょう。

神の御子が種となり、この地に蒔かれると多くの実が実ります。 種も、種蒔く人も、その種が蒔かれる地も、すべてキリストです。 これが、神様のご計画の成就です。

さらに霊によって柔らかい心で、主のみこころを尋ね求めていきたいと思います。 その道標の一つとして、今回の学びが皆さんの、霊の深みに漕ぎ出されますようにと願っています。

